様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１２７８

研究課題名（和文）英文理解の多次元的な一貫性構築：テキスト，学習者，タスク要因を踏まえた統合的検証

研究課題名（英文）Coherence Building of Multidimensionality in EFL Reading Comprehension: Integrating Text, Learner, and Task Factors

研究代表者
卯城　祐司（USHIRO, Yuji）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：６０２７１７２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，日本人英語学習者の文章理解プロセスを，5つのタイプの情報のつながり（状況的次元：登場人物，意図，因果，時間，空間）の観点から検証したものである。また，テキストの一貫性のレベル，学習者の熟達度，読解指導が，文章理解プロセスにどのように作用するかを，日本人学生・大学院生を対象とした視線計測もしくは思考発話データを分析することで検討した。結果より，読み手は登場人物の行動や意図に関するつながりを比較的安定して理解できることが示された。また，内容を心にイメージしながら読ませる教示が，物語文における登場人物や位置関係などのつながりの理解を促す可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
5つの状況的次元の学習者の理解と文章理解の更新プロセスについて，テキスト（一貫性のレベル），読み手（熟達度），読解指導（教示）との関連を検討することで，本研究が今後の英文読解モデルの発展に貢献することが期待される。また，研究手法について，自然な読解状況を再現する視線計測と，読み手の処理を質的に検討する思考発話法を用いることで，学習者の読解プロセスを詳細に検討することができた。本研究の成果により，学習者が情報間のつながりを意識して英文を読解する力を育成するための，教材分析や指導法に関して有益な示唆が得られることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study examined the text comprehension processes of Japanese learners of English during reading in terms of five types of information linkages (situational dimensions: protagonist, intentionality, causality, temporality, and spatiality). The effects of text coherence level, learner proficiency, and reading instruction on comprehension processes were examined. The results of the analysis of Japanese undergraduate and graduate students' eye movements or think aloud protocols indicated that readers were relatively stable in understanding the coherence of the protagonist and intentionality. It was also suggested that instruction in which readers are asked to read the text while visualizing the content in their minds encourages their understanding of the connections between the actions and positions of characters in narrative texts. The research findings have implications for further developing the reading model, research methodology, and classroom reading instruction.

研究分野：Applied Linguistics

キーワード：英語教育　リーディング　視線計測　文章理解　状況モデル　心理言語学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

読み手が文章を適切に理解するためには，文章の内容を描写した豊かな情景 (状況モデル) を心内に思い描くことが必要となる。読み手は，既に読解した先行情報から構築した状況モデルを，現在読んでいる情報と一貫性を持って結び付け，読解中に随時状況モデルを更新していくことが求められる。しかしながら，外国語として英語を学習する読み手の場合は，単語や文の処理に終始してしまい，断片的な理解に陥ってしまうことが多い。本研究では，英語学習者の読解時の状況モデル更新のプロセスに，テキストや学習者の要因がどのように作用しているかを検証し，どのような教師の支援が有用かを明らかにすることを目指した。

状況モデルの更新に関する理論モデルであるイベント索引化モデル (Zwaan & Radvansky, 1998) では，テキスト情報間の 5 つのつながり (状況的次元) が仮定されている：登場人物の特徴と行動 (同一性)，物理現象の原因と結果 (因果性)，登場人物の意図と行動 (意図性)，出来事が生じる順番 (時間性)，事物や登場人物の位置関係 (空間性)。

先行研究では，主に母語話者を対象にこうした 5 つの状況的次元の更新プロセスが検証され，読み手のつながりに対する理解度が次元によって異なることが示唆されている (e.g., Wassenburg et al., 2015)。学習者を対象とした研究では，主に同一性の次元のみが検証され，また，1 文ごとに英文を提示する自己ペース読みによって読解処理が検討されてきた。こうした研究では複数の次元に対する処理の容易さ/困難さを比較検討することができず，自然な読解環境での客観的な検証に欠けていた。

そこで筆者らは，視線計測を用いたアプローチにより，日本人英語学習者の複数の状況的次元の更新プロセスを検証してきた (e.g., Ushiro et al., 2016, 2019)。具体的には，文章の前半と矛盾する目標文に遭遇した際の読解時間や視線の停留時間，及び先行情報への読み戻りの頻度を，矛盾が伴わない統制条件と統計的に比較することで検証してきた。これまでの研究成果より，日本人英語学習者が理解可能な次元や理解に困難を抱える次元 (i.e., 空間性) について示唆が得られている。

本研究では，過去の科研費研究課題 (課題番号：16H03439) と同様のアプローチを用いつつ，状況モデル構築や更新のプロセスを包括的に検証するため，提示する英文の一貫性のレベル (テキスト)，学習者に与える読解教示 (タスク)，読解熟達度 (学習者) を考慮に入れ，学習者の状況モデル更新のプロセスを検討した。

２．研究の目的

上記の背景から，本研究では，学習者が英文理解の 5 つの状況的次元を更新する認知プロセスを包括的に解明することを目的とした。この目的を達成するため，3 つの研究課題 (Research Questions: RQs) を設定した。RQ1 では，全文提示形式での検証が乏しかった時間性，空間性の次元を含めた 3 次元を対象とした。RQ2 では，一貫性の維持が比較的容易であると示されている同一性，因果性，意図性の次元を対象に，一貫性のレベル (矛盾する情報間の距離) を操作した。RQ3 では，これまで最もよく検証されてきた同一性の次元と，つながりの理解が難しい傾向にある時間性，空間性について，異なる熟達度層の学習者を対象に読解教示の効果を検討した。なお，COVID-19 の影響により，当初計画していた視線計測機器を用いた対面実験の実施ができなかった年度については，遠隔で実施可能な研究手法に変更して調査を行なった。そのため，RQ1, RQ2 (それぞれ実験 1, 2 に相当) については視線計測を，RQ3 (実験 3, 4) は読解中に考えていることを口頭で発話してもらう思考発話法により学習者の英文読解処理を検証した。

RQ1: 日本人英語学習者は読解中に同一性，時間性，空間性のつながりをどのように理解するか。
RQ2: 日本人英語学習者は読解中に同一性，因果性，意図性のつながりをどのように理解するか。また，つながりを理解できる情報の一貫性のレベルはどの程度か。
RQ3: 異なる熟達度の日本人英語学習者の同一性，時間性，空間性のつながりの理解と更新プロセスに読解教示は影響するか。

３．研究の方法

(1) 実験材料

関連する先行研究 (Wassenburg et al., 2015 など) からテキストを選定し，英語学習者用に語彙頻度や統語的複雑さ等を統制したものを使用した。本研究では，実験材料は 5 つの状況的次元のいずれかに関する「矛盾を含むもの」と「含まないもの」を用意した。テキストには，「導入文」，目標文と内容的に一貫する，もしくは一貫しない「先行情報」，目標文と先行情報の間に挿入された「フィラー文」，分析対象となる「目標文」，物語の締めくくりとなる「ポスト目標文」が含まれた (次頁の表を参照)。

本研究では，実験 1–4 を通して同様のテキストを使用した。なお，実験 2 では，一貫性のレベル (先行文脈と目標文の間の情報の距離) を操作するため，表中のようにフィラー文が「1 文」の条件と，「4 文」に増やしたバージョンの実験材料が作成された(e.g., They read the menu to decide what to eat. It didn’t take much time for her to decide. Her boyfriend was so hungry because he didn’t have

breakfast. So, he chose a large-size dish from the menu.)。

表. 使用した実験文の例 (同一性次元)

各文の役割	テキスト
1. 導入文	Haruka met her boyfriend for lunch at a restaurant.
2. 先行文脈	She always wanted to eat fantastic junk food. (一致条件)
	She had been a strict vegetarian for 10 years. (不一致条件)
3. フィラー文	They read the menu to decide what to eat.
4. 目標文	Haruka first ordered a popular cheeseburger and French fries.
5. ポスト目標文	Her boyfriend then ordered a large-size meat spaghetti plate.

(2) 実験手順

日本人大学生・大学院生を協力者とし (実験 1: 39 名;実験 2: 39 名;実験 3: 21 名;実験 4: 39 名), 実験材料のテキストをコンピューターの画面上で読解してもらった。

実験 1, 2 では，テキストの全文が一度に提示され，読解中の処理が視線計測装置によって計測された。特に，目標文に対する注視時間，先行情報への読み戻りの頻度が記録された。

実験 3, 4 では，テキストが画面に 1 文ずつ増えていく形で表示され，協力者は読解時に考えていることを全て発話した。遠隔会議システムにより，読解時の画面や発話データが記録された。

実験 1～4 を通して，協力者にテキストの内容を理解することを目的に読んでもらうため，テキスト内容についての理解質問 (Yes/No で解答) を，各テキストの読解後に実施した。さらに，実験 3, 4 では，上記の内容理解を目的に読む通常の条件に加え，テキストで描写される状況を心中にイメージしながら読む「イメージ教示」条件下でも読解が行われた。

(3) 分析方法と観点

実験 1, 2 の視線データについては，(a) 目標文の読解時間，及び (b) 目標文以後の領域から先行文脈に読み戻る頻度が，矛盾を含む/含まないテキストの間で異なるか統計的に比較した。また，実験 2 では，矛盾効果が見られる一貫性のレベルも検討した。

実験 3, 4 の発話データについては，矛盾を含むテキスト読解時に，目標文読解以降で (c) 矛盾に気づいていているか (矛盾検知), (d) テキストが一貫したものになるよう矛盾の修正や解決を試みている発話が見られるかどうか (矛盾修正) を，内容理解のための読解とイメージ条件下の読解で異なるかを統計的に比較した。

(4) 結果の解釈

実験 1, 2 で得られる (a) (b) に関する結果の解釈として，協力者が文間のつながりに即して状況モデルを更新している場合は，文間の矛盾を含むテキストが提示された際に矛盾に気づき，一貫性を維持しようとすると考えられる。その際に付加的な処理がかかるため，目標文に対する読解時間は，矛盾を含むテキストにおいて増加すると予想される。また，矛盾が生じた原因を探るため，矛盾を含むテキストでは矛盾を含まないテキストに比べ，先行情報に読み戻る協力者の割合が高くなると予想される (van der Schoot et al., 2012)。こうした，矛盾を含むテキストにおける目標文に対する読解時間や先行情報への読み戻りの増加は「矛盾効果」と呼ばれ，文間のつながりの理解を示す証左とされる。読み手が状況的次元のつながりを意識している場合，矛盾する情報を隔てる距離が離れた場合にもこうした効果が確認されると期待される。

上記の矛盾効果と同様に，実験 3, 4 で得られる (c) (d) に関しても，協力者が文間のつながりを理解している場合には，協力者は矛盾検知の発話をすることが予測される。さらに，状況モデルを更新し，テキストを一貫したものとして理解しようとする場合には，矛盾修正を試みる発話が起こると考えられる (Hakala & O'Brien, 1995)。

４．研究成果

[実験 1 (RQ1)]

目標文に対する初期注視継続時間 (目標文を注視してから他の文に移るまでの注視時間) について，同一性，時間性，空間性のいずれの次元でも矛盾効果は確認されなかった。しかし，先行文脈への読み戻りに関しては，同一性の次元で矛盾効果が確認された。このことから，同一性は読み戻りによる方略的な処理によりつながりの理解が確立されること，時間性と空間性の一貫性の維持は，同一性と比較してつながりの理解が困難であることが示された。

[実験 2 (RQ2)]

目標文から先行情報に読み戻った回数を分析したところ，同一性，意図性のテキストでは，矛盾情報が近くで提示される局所的一貫性あるいは離れて提示される大局的一貫性について，矛盾効果が確認された。一方，因果性のテキストではそうした矛盾効果が確認されなかった。

結果より，協力者は，同一性，意図性のつながりを読解中に比較的安定して理解し，大局的なレベルについても状況モデルを更新している可能性が示唆された。一方，因果性のつながりの理

解は，学習者にとって難しい可能性が示唆された。因果性については，過去の研究でつながりの理解が確認されていた事例もあったものの，本実験とテキストの提示条件が異なっていることが結果に影響したと考えられる。

[実験 3 (RQ3)]
　協力者の発話を分析した結果，テキストで描写されている情景を心内にイメージしながら読む「イメージ教示」は，空間性の矛盾検知を促すこと，同一性についてはさらに次の処理段階である矛盾修正を促すことが明らかとなった。一方で，時間性には教示の効果は見られなかった。
　結果から，イメージ教示は空間性や同一性の一貫性のつながりの理解の一助となりうることが示唆された。

[実験 4 (RQ3)]
　より熟達度幅のある協力者を対象に発話データを分析した結果，読み手の熟達度に関わらず，イメージ教示は同一性のつながりの維持を促進したことが示された。一方，実験 3 に反して，空間性に関してはイメージ教示の効果は確認されなかった。
　実験 3, 4 の結果を総合すると，読み手は比較的安定して同一性のつながりを理解することができており，熟達度に関わらずイメージ教示が状況モデルの更新を促すことが示唆された。一方で，学習者にとってつながりの理解が困難な空間性は，教示があることでつながりを理解しようと注意が向く読み手と，そうでない読み手が存在しており，読み手の特性を考慮したさらなる検証が必要であると考えられる。また，時間性については，読み手の注意を物語の時系列に向けることにイメージ教示が適していない可能性が示唆された。

[まとめと示唆]
　本研究の成果は以下の 3 点にまとめられる。
(1) 日本人英語学習者は，読み戻りにより同一性のつながりを理解するが，時間性，空間性の理解には困難が伴う。
(2) 日本人英語学習者は，読み戻りにより同一性や意図性のつながりを局所，大局的なレベルまで理解するが，因果性の理解には困難が伴う。
(3) イメージ教示は，日本人英語学習者の空間性のつながりの理解や，同一性のつながりの更新プロセスを促す効果が期待できる。

　本研究により日本人英語学習者がつながりを理解し，状況モデルを更新しやすい，および，更新しにくい物語文の状況的次元が明らかになった。また，教育的示唆として，読解教示が，状況的次元のつながりの理解や更新に与える影響を明らかにすることができた。
　教示が読み手に与える影響は一様ではなく，影響を受ける次元や，読解処理のレベルが異なることから，読解指導においては，読み手に着目させたい情報の特性や読み手に促したい処理を考慮した上で，学習者に指導していく必要があると考えられる。
　また，本研究の結果から，研究手法に関する示唆も得られた。本研究では，読解中の処理を視覚的かつ客観的に捉える視線計測と，処理内容を読み手に報告される思考発話法を用いて検証を行った。こうした手法は相互補完的なもので，より詳細に読み手の読解処理を検証することが可能となる。本研究の成果が今後の英文読解モデルの発展に寄与することを期待したい。

[引用文献]

Hakala, C. M., & O’Brien, E. J. (1995). Strategies for resolving coherence breaks in reading. *Discourse Processes*, *20*(2), 167–185. https://doi.org/10.1080/01638539509544936

Ushiro, Y., Nahatame, S., Hasegawa, Y., Kimura, Y., Hamada, A., Tanaka, N. Hosoda, M, & Mori, Y. (2016). Maintaining the coherence of situation models in EFL reading: Evidence from eye movements. *JACET Journal*, *60*, 37–55.

Ushiro, Y., Ogiso, T., Hosoda, M., Nahatame, S., Kamimura, K., Sasaki, Y., Kessoku, M., & Sekine, T. (2019).How EFL Readers Understand the Protagonist, Causal, and Intentional Links of Narratives: An Eye-Tracking Study. *ARELE*, *30*, 161–176. https://doi.org/10.20581/arele.30.0_161

Wassenburg, S. I., Beker, K., van den Broek, P., & van der Schoot, M. (2015). Children’s comprehension monitoring of multiple situational dimensions of a narrative. *Reading and Writing*, *28*, 1203–1232. https://doi.org/10.1007/s11145-015-9568-x

Zwaan, R. A., & Radvansky, G. A. (1998). Situation models in language comprehension and memory. *Psychological Bulletin*, *123*(2), 162–185. https://doi.org/10.1037/0033-2909.123.2.162

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 Ogiso, T., Komuro, R., Nahatame, S., Mizugaki, R., Tando, K., Mikami, Y. & Ushiro, Y.	４．巻 34
２．論文標題 Effects of Image Instruction on Coherent Understanding of the Protagonist and Spatial Information During Narrative Reading for Learners of English as a Foreign Language.	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan	６．最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ushiro, Y., Ogiso, T., Komuro, R., Nahatame, S., Mizugaki, R., Tando, K., & Mikami, Y.	４．巻 33
２．論文標題 Effects of reading instruction on maintaining coherence of protagonist, temporality, and spatiality in narrative reading	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan	６．最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ushiro, Y., Hosoda, M., Komuro, R., Mori, Y., & Nishi, T.	４．巻 66
２．論文標題 Quantitative and qualitative effects of the reading goal on the monitoring of global causal coherence in L2 reading	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JACET Journal	６．最初と最後の頁 115-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Nahatame, S.	４．巻 71
２．論文標題 Text readability and processing effort in second language reading: A computational and eye-tracking investigation	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Language Learning	６．最初と最後の頁 1004-1043
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/lang.1245	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ushiro, Y., Ogiso, T., Hosoda, M., Nahatame, S., Komuro, R. & Nishi, T.	4．巻 32
2．論文標題 How Japanese EFL readers maintain the local and global coherence of protagonist, intentionality, and causality in narratives: Evidence from eye movements	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan	6．最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ushiro, Y., Hosoda, M., Ogiso, T., Kamimura, K., Sasaki, Y. & Komuro, R.	4．巻 65
2．論文標題 The relationship between validation and comprehension in L2 readers: A perspective from different dimensions of situation models	5．発行年 2021年
3．雑誌名 JACET Journal	6．最初と最後の頁 125-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ushiro, Y., Ogiso, T., Nahatame, S., Hosoda, M., Kamimura, K., Sasaki, Y., Komuro, R., Okada, R., & Aoki, S.	4．巻 31
2．論文標題 EFL readers’ understanding of protagonist, temporal, and spatial links in narrative: Evidence from eye tracking	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan	6．最初と最後の頁 97-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ushiro, Y., Hosoda, M., Kamimura, K., Ogiso, T., & Sasaki, Y.	4．巻 64
2．論文標題 EFL readers’ processing difficulty with understanding different situational dimensions of narrative texts: An eye-tracking study	5．発行年 2020年
3．雑誌名 JACET Journal	6．最初と最後の頁 187-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 小木曽智子，小室竜也，名畑目真吾，水書亮，工藤大奈，丹藤慧也，三上洋介，小野由香子，卯城祐司．
2．発表標題 読解教示と学習者の熟達度が物語文の空間・登場人物の一貫した理解に与える影響―思考発話プロトコルの分析から―
3．学会等名 全国英語教育学会第47回北海道研究大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Komuro, R., Mori, Y., Hosoda, M., Mizugaki, R., Tando, K., Mikami, Y., & Ushiro, Y.
2．発表標題 The effects of reading instruction on temporal coherence maintenance: Focusing on second language learners
3．学会等名 The 32nd Annual Meeting of the Society for Text & Discourse, Online Conference（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Ushiro, Y., Komuro, R., Hosoda, M., Mori, Y., & Nishi, T.
2．発表標題 How do Japanese L2 readers maintain causal coherence: Online and offline protocol analysis
3．学会等名 31st Annual Meeting of the Society for Text & Discourse Online Conference（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 卯城祐司，小室竜也，小木曽智子，名畑目真吾，江田博之，工藤大奈，丹藤慧也，三上洋介，水書亮
2．発表標題 読解教示が物語文の時間・空間・登場人物に関する情報のつながりの理解に与える影響 ―矛盾検知と思考発話プロトコルの分析から―
3．学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 Ushiro, Y., Hijikata, Y., Ogiso, T., Komuro, R., Nishi, T., Kobayashi, S., Okano, S., & Sato, R.
２．発表標題 Systematic research synthesis on first and second language multiple-text reading
３．学会等名 AAAL (American Association for Applied Linguistics) 2021 Virtual Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ushiro, Y., Ogiso, T., Nahatame, S., Hosoda, M., Hijikata, Y., Sasaki, Y., Komuro, R. & Kamimura, K.
２．発表標題 Monitoring global coherence of protagonist, causal, and intentional dimensions in second language reading: A preliminary study on eye tracking
３．学会等名 30th Annual Meeting of the Society for Text & Discourse（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Ushiro, Y., Ogiso, T., Nahatame, S., Kamimura, K., Sasaki, Y., & Mori, Y.
２．発表標題 Coherence monitoring of protagonist, temporal, and spatial dimensions in second language reading: A preliminary study employing eye tracking
３．学会等名 29th Annual Meeting of the Society for Text & Discourse（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ushiro, Y., Ogiso, T., Kamimura, K., Sasaki, Y., Inaoka, R., Sekine, T., Komuro, R., & Voslar, M.
２．発表標題 Monitoring multiple situational dimensions in EFL narrative texts: Focusing on readers’ skill and comprehension
３．学会等名 17th Asia TEFL International Conference and the 6th FLLT International Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 卯城祐司・小木曽智子・神村幸蔵・佐々木大和・名畑目真吾・細田雅也・青木重憲・岡田龍平・小室竜也・Voslar, M.
２．発表標題 物語文における時間・空間・登場人物に関するつながりの理解―視線計測データの分析から―
３．学会等名 第45回全国英語教育学会弘前研究大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 名畑目真吾・松宮奈賀子 編著	４．発行年 2021年
２．出版社 協同出版	５．総ページ数 209
３．書名 新・教職課程演習　第12巻　初等外国語教育	

１．著者名 卯城祐司・樫葉みつ子 編著	４．発行年 2021年
２．出版社 協同出版	５．総ページ数 215
３．書名 新・教職課程演習　第18巻　中等英語科教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

筑波大学大学院　英語教育学サブプログラム　卯城祐司研究室 https://www.u.tsukuba.ac.jp/~ushiro.yuji.gn/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	名畑目　真吾 (Nahatame Shingo) (60756146)	筑波大学・人間系・助教 (12102)	
研究分担者	長谷川　佑介 (Hasegawa Yusuke) (40758538)	上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授 (13103)	
研究分担者	木村　雪乃 (Kimura Yukino) (40779857)	獨協大学・法学部・准教授 (32406)	
研究分担者	濱田　彰 (Hamada Akira) (50779626)	神戸市外国語大学・外国語学部・准教授 (24501)	
研究分担者	細田　雅也 (Hosoda Masaya) (00825490)	成城大学・文芸学部・准教授 (32630)	
研究分担者	森　好紳 (Mori Yoshinobu) (10824170)	白鴎大学・教育学部・准教授 (32204)	
研究分担者	土方　裕子 (Hijikata Yuko) (10548390)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	小木曽　智子 (Ogiso Tomoko) (90965427)	富山大学・学術研究部教育学系・講師 (13201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関